

# 哈爾濱

二甲一 田 中 茂 文

一般の旅行者のそれと少しも變らない。名所見物を終へて、暑さの爲に殆んど中心を失ひさうな體を引きづる様にして、啓三と双村が、双村の下宿に歸つたのは午後七時すぎであつた。

キタイスカヤ街から、少し入込んだ、横町に入口のある筋骨たくましい老翁を聯想させる灰色にくすんだ、石造の建物のキタイスカヤに面した四階の一部屋が彼の下宿であつた。薄暗い、黴臭い長い石の段階を、塗料のはげた、頑丈な鐵の手欄につかまり乍ら、啓三は、双村の説明を聞きつゝ上つて行つた。

「この一階は、眞柴洋行―毛皮商の一事務室だ。」

「――二階は面白いぞ。白系のタイピストに姑娘のダンサー、それと易者の老頭オールドに、日本人の會社員夫婦。……さあ四階と」

彼は、大きな鍵束の中から、一つを抜き出して、ドアを明けると、啓三をうながして廊下に入つた。

「俺の部屋はこの一番奥だ。一番入口が東栢の社員夫婦。俺に一番良くして呉れる人達だ。君も挨拶しといたが良いだらう。」

「次は家主の娘の部屋だ。―勿論白系さ。恐らく、君も直ぐ近附きになれると思ふ。」

そこで廊下がつきると、彼等は大きな部屋に入つた。その部屋には、ピアノと多數の小さな机と、黒板とがあつて、

ロシア文學のアルファベットの入つた漫畫が壁一面に貼つてあり、彼はロシアの幼稚園だと教へた。

その部屋を突き抜けると、そこが彼の部屋だつた。セメントのむき出しの壁の、何一つ裝飾の無い部屋に、大きな姿見だけが、調和を破つて、部屋全体にユーモラスな雰圍氣を與へてゐた。

彼は、直ぐ窓の所へ行つて、二重窓を開けて、望しむさうな暑苦しい部屋の空氣を出した。

窓から見える限りは、ハルビンで、最もロシア色の強い、最も古い部分であつた。

殆んどすべての建物は、石造ではあるが、年の爲に濃いセピア色にくすんで、スレートの屋根根には眞赤な太陽が焼ける様に、ぎら／＼と當つてゐた。

啓三は暑さと、市内見物と、旅の疲勞とが一緒になつて、軽い目まひを起して、ぐつたりと寝台の上に仰向けに轉つた。日蔭の寝台のかけ毛布は、ひんやりと快よく、彼の感覺をなぶつて、彼の意識を確かにしようとする努力を助けて呉れた。

——あゝ——良い氣だ。疲勞は旅で尖つた俺の神經を柔に包むヴェールだね。

——今日は目廻が廻つたよ。——停車場、中央寺院、日本神社、博文館、ソフィスカヤ寺院——忠靈塔。それにポロタクシーどれも、ハルビンで無ければ見られないな。今日ほど深い愉快さを味はつた事は無い。旅の良さがつくづく分つた。正にハルビン情緒だね」

「あゝ。さうかも知れない。ポロタクはハルビン以外には無いね。お陰で、馬車がこゝだけは少いよ。あの車の古いのには驚くね。速力計も何も無くて、たゞあるものは油壓計だけなんて言ふほどのものもあるからね。まあロシア人の男のする仕事で一番眞面目なのはあれ位なものだらう。何んにしても、何處までも十錢で行くんだから」

「そんな事をして、食つて行けるのか」

「勿論、行けからしてゐるんだ。だが彼等の目つきを觀察して見給へ。或者は絶望的な、或者は狂つた様な目つきをしてゐるだらう。」

白系の生活は實際可哀さうなものだ。

彼等は現在の事實はどう仕様もないんだ。だから、或者は現實に打倒されて、宿命に走り、總てを絶望し、たゞ神によつてのみ生きてゐるんだ。ほら君は今日、中央寺院の前で總ての通行人が十字を切つて行くのを見て驚いたね。あれだ。

その他のものは、この不遇な現實から、どうかして突け出さうと、あがく者か、又は過去の花かさを徒に追つてゐる者だ。近い將來、日本がソヴェエトを打つて、帝政が復活されるだらうと眞劍に信じて、ルーヴル紙幣の山と同居し氣狂になつた者だつて、さらに居るんだ。

こうなると、もう發する言葉も無いね。君はハルピン情緒だと言つたが、そんな生易しい物ぢやあ無い。戦争には決して負けたくないね。争闘が我々人類に必然的なものとすれば理屈はどうあらうとも、是非勝たねばならぬ。——これが俺にハルピンが教へて呉れた教訓の最大なものだ。

男は生活能力無く女は一部の者を除いて他は Prostitution だ。救世主の如く仰ぐ者の居るレーニンやスターリンが、此處では、悪魔と同様な待遇を受けてゐるよ。ボルシエビキーと言はれただけで殺されかゝつた男も居るのだからね。だがハルピンは白系ばかりだと思つたら大間違だ。共産黨員だつて相當居るんだ。實際白系と赤系は人種的に見て、何の相違も無いのだから、滿洲國しても取締が難しいと言ふ話だ。

——思はず話に實が入つてしまつたが、所で君は元氣だつた？

「うん。まあね。他の多くの高校生と同じ様な平凡な生活をして居る。僅かの勉強と、讀書と、酒と、残りは睡眠

だ」

ふう。それに較べると俺の生活は變化が多かつた。——おい。君は確カルビイクインを持つてゐたね。久し振りに良  
い煙草が喫へるわい」

彼は啓三の差上した、煙草を取ると、うまさうに喫つた。四圍はすっかり夜になつて、切れる様に冷たい、夜氣が開  
け放たれた窓から忍び込んで、眞ぐ下のネオンが赤く、鮮やかに、硝子に反射してゐた。

薄いルパシカ一杯の双村は、話につり込まれて、忘れてゐたのか氣がついた様に立ち上ると、窓を閉ぢて下着を着  
た。そしてそのみがこの部屋の唯一の贅澤品である。銅製のサモワールから湯を出して紅茶を出して啓三にすゝめ  
た。

「この紅茶は、ハルピン製だ。上等品ぢやあないが。それでも日本製よりは良いぞ。——本當に俺の生活は變化があ  
つた。一大決心と共に、このハルピンの學校に來たが、學資は酒に費ひ、借金はするし、俺は一時どうなることかと本  
氣に危ぶんだが、まあ——どうやら學校だけは續けて來た。」

「成績は」

「どん尻りさ。成績等問題としてゐないと言へば聞えが良いが、實はどうにもならなかつたんだ。そら、學問に對す  
る情熱を失つたと言ふ奴さ。百の學問よりも、一つの經驗だところ考へてはゐるが、やはり淋しいね。

俺は君みたいに、眞面目に學校に通つてゐる奴を見ると、うらやましくなる——

「彼は答に窮して、曖昧な返事をした。

「然し、世の中つて不思議なものだね。世の中ほど嘘と芝居の多い所はないね結局人間は死ぬまで、立派に與へられ  
ぬを上手に演り續けたものが、偉いと言はれてゐるんだからね。人生は一種の喜劇だな。然し、ハルピンはさうでは

ない。本當の正劇——いや、むしろ悲劇に近いだらう。ハルピンは、喜劇をくびになつた役者のみを集めた檜舞台だよ。

話は別だが、社會に於て、我々が善だとしてゐることは本當に善だらうか。

良く考へて見れば、それは我々の過去の歴史から、さう考へてゐるんだ。そこには理論も何にもありはしない。苦し我々が善だとしてゐる事を悪だと考へたらどうだらう。悪を善だと考へたらどうだらう。その瞬間に於て善は悪となり悪は善となつてしまふ。

繰返して言ふが、我々の善悪の判断は輕卒きはまるものだ。一つの論據となすものがなく、たゞ過去及び現在の多數人がさう思ふからと言ふ危険きはまる、その事の核心には、一つも觸れて居ない、感情的なものだ。この感情的なものと、善悪の判断との間の大きなギャップを平氣で、何の疑ひも無しに踏み越えてゐるのだ。——」

「然し、その間のギャップを形に現はすことは大變難しいと思ふな。恐らく、どんな人でも完全には解決出來ないことだらう。然し大多數の人が善だと見做し、過去の經驗からして善ならば、この問題は証明されて一個の定理として價値づけられるのではあるまいか」

「理科にしては不似合なことを言ふね。然し嚴然たる証明無くして、定理にはならないことは君は百も承知してゐるだらう。あまり理論に走りすぎるかも知れぬが俺はこの間の關係をつけなければすまされないのだ。すべて物を見、考へる場合に、この點に引つかまつて、人の様に勇敢に善悪の判断を下し得ないのだ。だから苦しいんだ。そこで俺は、我々の上に重苦しく、のしかまつてゐる、舊い道徳を、投げ棄てるべく努力した。俺は法律に抵觸しない範圍の罪惡だと言はれてゐるものを、半ば反抗的にやつた。俺は道學者で言はしむれば、非道徳な、アヴノーマルな惡人者も知れない。然し俺は自分では、むしろ最も眞理に忠實な人間だと思つてゐる。」

啓三はこんな議論めいた話は、餘り好きでは無かつたが、中學時代彼と同じ考へ方であるた友のあまりの變り方に驚くと同時に又、彼の眞剣さに引かれた。

「俺は生活をもつと掘下げて赤裸々なありのままな人生の姿を見たい慾望に飢ゑてゐる——このハルビンの三年間の生活が、俺にこんな考へ方を注入して呉れたのかも知れない。一つの妥協も一つの輕信をも許さないのだ。

そして最も嚴正な觀察と綿密な推理によつて完全な人間性の發見と自我の確立とに進みたい。俺は、何か俺をしつかりと、つかまへて離さぬ核心が欲しい。

核心を持たぬと言ふことは、こんな特殊な町では恐ろしいことだ。若達のように、内地で周圍から適當に掣肘されて、一筋の道を行くことを餘儀無くされてゐるものは、或は核心はさう必要でないかも知れぬ。だが俺は是非とも必要なことだ。」

「——」

「あゝ俺もこんな眞面目な話をするのも何年振か！俺も完全な滿洲ゴロに成り下つてしまつた。君と別れた頃のあの純眞な氣持がもう一度持ちたいな。あ。ダンスホール、キャバレー——そんなものに入りびたつてゐたんだ。結局俺の性格が弱かつたのだ。

今日、君の來たのは、俺の荒んだ心に、熱いものを吹き込んで呉れた。友情！これほど眞實な嘘の無いものがあらうか？

——甘い感傷だと笑つて呉れ。だがこの氣持は、こゝで長年住んだ者でないと分らないだらう。結局人を生かすも殺すも「愛」だね。

實の話、日本人の若い娘の殆んど居ないことは、たまらないほど空虚なものだ。」

「良く分る。荒んだと言ふが。俺は決してさうだとは思はない。そんな氣持になつたのは結局、君の眞面目さが、君をさうさせたのだ。上手な、悪い意味での利巧な人間だつたら、君の一步手前で、するりと、身を變じてゐるだらう。我々高等小學校生の中にも、そんなのが多くて困るんだ。——」

彼は憂鬱さうに長い油をつけ髪を搔き上げ／＼聞いてゐた。啓三の話が途切れると二人は、喋りすぎた後によくある様にしばらくの間だまつて、考へにふけた。中學時代親友であつたと言へ、環境の相違と三年間の長い間隔とが作り上げた、少しばかりのぎこち無さは、完全にふつ飛んで、熱い、親友の間に特有な空氣が再び作り上げられた。

双村がふと時計を見て言つた。

「あゝ、九時か。今晚は夜の町を案内するつもりだつたが、今からでは少し遅いな。

君も今日着いたばかりだし、晝間相當引きずり廻はしたから相當疲れただらう。然し夜の軽い散歩も面白いぜ。一寸そのあたりを散歩しないか。」

啓三はこの提言に快よく承知した。今日晝間買ひ込んだルパシカを着ると、彼等は例の堅穴の様な階段を下りて町へ出た。

前で結んで垂らした、ルパシカの緒が、歩く度に大腿にはさ／＼當る、快よい感觸は久し振りに覆いた靴の 石鋪みの道を打つ音と共に、啓三に新鮮な感じを考へた。

北辰星の眞上に輝くこの町は、もう鋭い冷い夜氣に包まれてゐたが、未だ何處となく、ほの暖い晝の暑さの名残が残つてゐた。

眼前がぱつと明るくなると、彼等はキタイスカヤ街に出た。五彩の光の汎濫に、晝間の灰一色は、すっかり覆はれて、彼等が晝間通つた、南歐の小會都を思はせる落着いた氣分は何處にも見出すことが出来なかつた。

鋪道は散歩者で一杯だつた。然し日本人と支那人は極く小數で、さすがはロシア町だと言ふ感を強く起させた。彼等の大多數は公然と腕を組み合はせた若い男女であつた。

啓三は友を見送つて言つた。

「ナイーヴな、美しい光景だね」

「ふゝ、今は馴れたが、來た當初は、相當憐ましかつたぜ。」

「内地のこそくした戀愛よりも良いね。」

——然し風装から見ると、相當裕福さうぢやあないか」

「大部分、シヨツプガールか何かだ。彼女達は僅かな月給で父母や、弟妹を養つて、尙ほア、ラ、モードを着るんだから、世帯を持つたらきつと上手だよ。どうだい。君一つ、國際結婚をやつて見ないか。ロシアの女は男が、今言つた通り、生活能力が無いものだから、日本人が、妻くもてるんだよ。女専もあるし、相當教養も高いバリシナ（娘の意）も居るぜ。ハ……」

「親爺が目を廻すだらうな。ハ……」

白系の娘は實際美しかつた。好奇心と異國風の雰圍氣と、熱められた友情とで、上氣した、啓三は、キタイスカヤの女性の總てが嘗つて内地で見た女性のいづれよりも美しく見えた。

「綺麗だね。」

「こんなのは、ざらだよ。」双村も彼の下宿で話してゐた時の憂鬱な表情は消え失つて、延びくした屈託の無い顔をしてゐた。

「良夜恨むべし。友有り遠方より來る亦愉しからずやか」



「美しい町、美しい女、星の降る宵——

どこかへ行かう」

突然の提案に双村は驚いたが、彼をキタイヌカヤからノオゴロドナヤ街へ行く横町の喫茶店に案内した。

それは、内地のそれと、同じ位の黄色に塗られた部屋であつたが、豪華な裝飾が使用されてあつた。壁にはロシア式の象毛と金の象金の入つた、短劔と、その上に、銀色に輝く決闘用の長劔とが交叉して飾られて、柔らかな雰囲気、鋭く破つてゐた。その飾り付けの下には、クリーム色の古いグラント、ピアノがどつしりと置かれてあつた。

彼等が坐ると小女が奥から出て來た。彼女はバラ色の皮膚と、高い形の良い鼻と、美しく澄んだ空色の眼と、緑のリップンの良く似合ふ、金髪とを持つた小女で、電燈のはクリーム色の壁に彼女の美しいシルエツトを描いてゐた。

啓三は「Two Coffes and Russian Cakes」と註文した。

「パルドン」——鮮かな鼻音で彼女は答へた。

「分らないんだ。大抵の所は日本語が通するが——<sup>アハハ</sup>おい——」

と彼はロシア語で註文した。

「相當出来るぢやあないか」

「そりや、一週十四時もきたはれてゐるんだから。それに俺は北極太に行くんだから、止むを得ずやつてゐるんだ。言語は相手を知る手段だからね。——こゝに居る女の中にも、英語の出来るのが居た筈だ。話して見る」

双村は、その小女を呼んだ。

「日本語分る。」

「はいえ、ちひとも」

「英語何處で教はつた」

「母が教へて呉れたの。それにフランス語も。死んだお父さまは、そりや上手だつたわ」

彼女が考へく／＼單語を拾つて話すのは、啓三に取つてはまどろしかつたが、又一種の快よい、美しい子供とでも話してゐる様な氣がした。

「おい。じれつたいね。俺が聞いてやる」

双村が聞いた所に依れば、彼女はチタ生れで、革命の時父を失つて、母の爲に働いてゐるさうであつた。

「偉いもんだね。——して見ると革命後來たのも多いんだね」

「さう。革命の時に來たのが、一番窮乏してゐるよ。始めは燭台だとか、何んだとかを、賣り食ひしてゐたんだが、後には何にも無くなつて、貧民になつたのだ。ナハロツカヤに行つて見る。そんなのばかりだ。今日の飯にも困るものが多い。一切のパンの爲に身を投げ出す女だつてさらだよ。あそこに行つて見ると生の慾望の強さが身にせまる。彼等はパンのみに喘ぎ苦しんでゐるんだ。詩も無ければ音楽も無い。そんな事を考へる餘裕がないんだ。そして、あるものは、どうにもならない、恐ろしい現實ばかりだ。その現實に何處までも食ひ下つてゐるのが、曲りなりにでも生存し、神に祈り、詩を樂しむものが死んで行くのだ。」

「——」

「人間の本能の中でも、生きたいと言ふ慾望ほど強いものはあるまい。生きんが爲には、どんな罪惡、破廉恥でも避んで、犯すだけの勇氣が容易につくんだからね。人間の本性つて汚ないものだ。教養も體面も付焼刃にすぎないよ。」

「ハルピンは恐ろしい所だぜ。今日の見物位で歸つた旅行者は「平和な、エキゾチックな町だつた」と言ふだらう。だがこの平和に見える町でも薄いヴェールをぬげば地獄だ。虚無と絶望と狂信しが渦を卷いてゐる。殺人、強盜、誘拐

——あらゆる悪の巢窟だ。一度落ち込んだら何處までも、する／＼と滑り込む泥沼だ。下宿で俺が核心をつかまねばいかぬと言つたのも、こゝが恐ろしいからだ。」

彼は急に聲を落して、ハルピン特有だと言はれてゐる或種の行爲——見世物の話をした。

啓三は、そんな事が存在すること知つて、そうまでしなれば生きて行かれぬ、自系露人の生活に深い同情をすると同時に、青年らしい好奇心から、見たいといふ氣が涌き上つて來るのをどうしても壓へつけることが出来なかつた。

彼等の構成する空氣が、その物のそれと、大ひに食ひ違つたのに氣がついた双村は大き聲で笑つた。

「眞劍な顔をするなよ。奴等がジロ／＼見てるぢやあないか。——もつとも言葉は分らないから良いが——」

啓三は彼の言葉で我にかへつたが、又すぐ同情心からのみとは言ひ得ない、ある不純さを持つて、双村に子供だと、冷かされ乍らも想像を猛しくした。

(一一)

ふと啓三が眼をさまして、時計を見ると、七時少し過ぎてゐた。より多く活動するために、旅行中の朝寢は禁物なので、起きなければと思つたが、平常の床離れの悪い癖と、朝のみが持つ、充ち足りた氣分とで、半ば無意識に床の中で雜然と旅行中の出來事を追想した。

大連を振り出しに、旅費のある限り、あてどもない旅浪をしてゐること、旅順——大連——奉天——新京のこと、汽車で知り合つた姑娘のこと、昨日朝汽車でハルピンに着たこと、驛で三年振りに、彼の中學時代の唯一の親友である双村に會つて感激したこと、昨日の市内見物のこと、双村が變つてゐたこと、夜は喫茶店に行つてそれからキャバレーに行つたこと等が走馬燈の様に頭の中に次から次へと呼び上つて來た。彼の單調な今までの生活と全然かけ離れたそれ等の出來

事を、床の中で、足を曲げたり、延ばしたりして、思ひ出してゐたが、部屋の中が、暑さの爲に、暖くなつて來ると彼は、それ等の楽しい追想を一先づ斷念して起き上つた。

昨夜、始めての者は良く落ちると言つて、寢臺の壁と反對側の方に双村が並べて呉れた机や椅子を見て、彼は昨夜一度も落ちなかつた事を思ひ出すと急に可笑しくなつて、ふふと笑つた。充分な睡眠で昨日の勞勞は全く恢復し、滿洲特有の乾いた爽やかな朝の空氣を吸ひ込むと元氣が彼の健康な體の隅々まで、滿ち／＼て行くのが感ぜられた。

危険だから、決して呑むなと言はれた水道の水を用心しつゝ、ゆつくり洗顔を終つて歸つて見ると、寢臺が一つしかないで友人の下宿に寢た双村が白系の娘を連れて、部屋に居た。

雨季だと言ふにその日も快晴で、ハルピンは昨日と變らず、煤けた灰色をしてゐた。

寢臺の側にかためられたテーブルや椅子は定まつた席に置かれてあつた上に、机の上には昨日までは無かつた花瓶と花とが置いてあつた。後——になつて、それ等は、その娘が持つて來て呉れたと言ふことを知つた。

啓三は、一寸娘の方を見て、双村の顔を見ると、彼は立ち上つて軽い冗談を交へ乍ら、彼に紹介した。

「昨日、一寸君に話したこの下宿の家主の御嬢さんだ。日・支・英・佛語に堪能で、ツーリスト・ビュローに勤めてゐられるリーヴァさんだ。」

啓三は固くなつて挨拶した。

彼女は珍らしく立派な金髪と蒼い眼の持主で、心持寄せた均勢の取れた體に、白い粗い地の、裾の短い服の良く似合ふ女だつた。

裾の下からは、日本人には決して見られない濃い茶色の靴下につままれた形の良い足があつて、白い小さなサンダルを穿いてゐた。その白い趣味の良い洋服は、部屋に涼しい感じを與へた。

啓三は、若い女性と話した経験に乏しく、それに異國人だったので初めは氣後れがしたが、彼女のヨーロッパ人らしい自由さと、双持の馴れ切つた應對に、すぐ彼も、その雰圍氣に溶け込んで、冗談さへも言ひ得る状態にまでなつた。

啓三は彼等に松花江へ行くことを提議した。そこで、近くの食堂で、啓三に取つては、朝食とも晝食とも附かぬ食事をして、松花江（キタイスカヤ）を突き切つた所にあり、下宿からは二十分とかゝら無いので、まで歩いて行つた。

途中、彼女は不思議さうに、啓三の焼杉の下駄を見てゐるので、これは下駄だと答へると、

「グエター——男もはくの」

「勿論。我々學生は好んではきまず」

「さう。私、女ばかりが、はくのかと思ひました。」

彼女の舌つたるい發音と、短い文章を、ぼつ／＼と切つて言ふ話し方が、好にエキゾチックな、別な實觀なこもつて啓三は嬉しかつた。

松花江は啓三の様に内地の河川以外見た事の無いものに取つては、恐ろしく勝手の異なるものであつた。豊富な濁水が浪打ち、大きな汽船——恐らく五百噸以上もあらう——が、波頭場に繋り、島である大陽島は遠く、恰も啓三の故郷に近い、九州の最北端の海岸から本州を眺めたのと同じ感を抱かせた。

河に沿つて、立派な石舗みの散歩道があり所々にはテラスや氣の利いた露天の喫茶店があつた。そして鈴懸の並木の下には、ベンチが置かれてあつて、日躍——丁度その日に當つてゐた。——行樂を樂しむ人で一杯だつた。

汚れたルパンカを着て悠然とベンチに腰を下ろしてゐる自髪の老人——彼はぼんやりと、立派な自い大きな口髯の中で、パイプをくゆらせ乍ら、對岸を眺めてゐた——。眞白い小人を連れた支那婦人、細い杖を脇の下に意氣にかい込んで單眼球をかけた、白服の紳士、一見して、それと分る華美な風をし、指を赤くそめた、キャバレーのダンサー——恐

らく今夜の客を物色してゐるのであらう——等を見ることは、啓三にとつては大變興味深いことであつた。

「ボートに乗らう」

彼の聲に促されて啓三とリーヴァは船着き場に下り、苦力のわめき誘ふのを上手に双村は交渉して、彼等はボートに乗つた。

苦力も一緒に乗つたので不思議に思つて啓三は双村に聞いた。

「こゝは内地ぢやあないんだぜ。苦力が漕いで呉れるんだ。我々はたゞ一時間この松河川の風光を愛でてれば良いんだ。君はリーヴァーと並び給へ。その位置の方が説明易いからね。うふ。仲々良いなあ。ねえリーヴァ、この男は昨夜國際結婚をすると言つておましたよ」

「まあ」

「嘘ですよ。ハ……………」

彼等はこの様な氣輕な話題を次から次へと拾つては話した。

晝の燃える様な太陽が波にまぶしく反射して、遮光眼鏡を置けた。リーヴァさへ、眼が痛いと言つた。

「あ、江防艦隊が入つてゐるな。見ろ」

双村の指さした下流に多くの短艇に囲まれた二艘の砲艦があつた。

「ほう。あれが江防艦隊か。」

「うん。すると今晚あたり水兵で町は賑ふな。あの艦隊の御蔭で俺達はこんな暢氣な舟遊びが出来るのだ。訓練は婁いぞ。恐らく、内地の海軍でもあんなにはしてゐないだらう」

流に下るに従つて、艦上の操練が手に取る様に見える。リーヴァは水兵が好きだと言つてはしやいだ。

啓三はふと松河江の鐵橋の下にある大きなトーチカが目についた。

「大きなトーチカだね」

「あのトーチカや、この艦隊がある以上、未だ〳〵滿洲は王道樂土だと言へないね。こんものゝ存在は未だ治安の不完全さを裏書きしてゐるようなものだからね。俺はこのトーチカを見る度に、何故滿洲に來たかを再認識するんだ。そして、このトーチカの日も早く消え去らんことを祈つてゐる。安價な愛國主義への妥協ではない。俺は、滿洲へ來て心の底から、はつきりさう思つてゐるのだ。滿洲國が平定されたら、は俺シベリアに行くんだ。〳〵國を出るときあ玉の膚今ぢや槍きづ刀きづ〳〵と言ふ歌を知つてゐるか、全くこの歌は好きだ。」

「ヒロイズムだね。」

「ヒロイズムだつて良いぢやあ無いか。我々青年からヒロイズムを除いたら何が残る。女の様なロマンチズムとあとは、ひからびた形骸だけだ。滿洲が我々を、引きつける魅力はヒロイズムを満足させるからだ。見ろ、内地では青年は望しきさうぢやないか。青年よ何處へ行くと言ひ度い位だ。」

彼は急に眞顔になつたが、リーヴァの居るのに氣がつくと、再び陽氣に冗談を飛ばし始めた。

啓三は、双村がリーヴァにロシア語で話してゐる間、ハルビンに着いてから見たり聞いたりして、雜然と頭の中に投げ込まれてゐる知識を整理しようと、あせつたが、どうしてもその一つ〳〵が彼の能力以上の事の様思はれたので斷念した。

松花江はボートが織る様に打ち交つて、オールの爲に出来る波紋は、波の爲に直ぐつぶされてしまつてゐた。

彼はそれを見て、何かを暗示してゐると思つたが、それをはつきりと考へることが出来なかつた。

——突然何が可笑しいのか、リーヴァと双村は激しく笑ひこけた。

—— 完 ——